

教科主張

家庭科の本質

子どもは何気なく過ごしている生活に目を向けて立ち止まる時「なぜこうするといいのだろう」「もっといい方法があるのではないか」「もっとよくしたい」などの思いをもち、そこから解決したい課題を見つけていく。そして、その課題解決に向けて、自分もつ知識や技能、これまでの生活経験を基に解決方法を考え、実践や評価、改善を重ねていく。その中で自分なりの見方や考え方を働かせながら課題解決に向かって試行錯誤する子どもは、実践における結果のみならず、他者の思い、見方や考え方などにふれることで様々な価値観と出会い、自分なりの思いを広げたり深めたりしていく。こうした自分ならではの課題解決の過程を経て、何気なく過ごしている生活を見つめ直すことで、自分の見方や考え方を広げ、考えを再構築するとともに、最適解や自分なりの納得解を見つけていく。これが家庭科における学びであり、このような学びをくり返していくことは、子どもがその時々々の状況を考え意思決定する姿や、家庭や地域などにおいてよりよい生活を営もうと工夫する姿につながり、その子の人生はより豊かなものになるだろう。

家庭科の考える『その子らしく学ぶ』とは ～人間性の涵養につながる経験～

子どもは、日常生活の中の事象に目を向けた時、自らの五感、既有的知識や技能、これまでの生活経験などを頼りに自分なりにその事象に関わる。その中で「おいしく作りたい」「どうしたらうまくいくだろう」などの自分なりの思いが生じ、その達成に向けた課題が設定されていく。そして、自分なりの見方や考え方を働かせながら情報を収集したり、様々な方法を試してより自分に合ったものを探したりするなど、その課題の解決に向けた試行錯誤を行う。

その課題解決に向けた試行錯誤の中では、自分の思いや考えに向き合うだけでなく、他者との関わりによって新たな価値観と出合うこともある。例えば「快適に眠るには、どんな素材のパジャマがいいのか」という課題をもった上で、

冬のパジャマに通気性は不要だと考えている子どもが、多少の通気性があることで気持ちよく眠ることができるという他者の考えに出会うと「たしかに冬も汗をかくから通気性が少しは必要かもしれない」と、これまでの経験も踏まえ、改めて課題について考える。そういった過程で「自分にとってどうか」「自分は何を求めているのか」「自分に何ができるか」という判断をくり返すことで「自分」というものをより確かにし、新たに得た価値観を今後のパジャマ選びの視点として取り入れていくこともあるだろう。このように自分にはなかった考えや価値観に出会うことは、新たな課題を追究したいという思いにつながったり、自分の生活だけでなく自分自身を見つめ直し「自分」を確立したりすることにもつながる。

様々な価値観に出会うきっかけは他者との関わりだけではない。子どもが日常生活では立ち止まりにくい事象について考えること自体が、様々な価値観に出会うきっかけとなる。子どもは、改めて身近な事象を見つめ直すことで、これまでもっていた見方や考え方、価値観を更新し、その後の家庭生活において判断をする際に活用するようになるだろう。

こうして、自分の思いを基にした課題を設定し、その解決に向けて材や他者、自分といった対象と自身とを結びつけながら試行錯誤する中で、判断をくり返し、最適解や自分なりの納得解を得たり、自らを見つめ直して自分を知ったりする。このような、自らを軸として試行錯誤を重ねた経験やそれらを通して得たものが「学び」であり、そこには「人間性の涵養につながる経験」も存在し、全てはその子自身を形成する一部となっていく。これらが、家庭科部の考える『その子らしく学ぶ』である。